

## 夢

運営委員長 榎場 重正

夢というのは人が眠っている状態においてみた特異な体験を目ざめた後に試みる回想で、特異な体験というのは生理学的には睡眠過程にともなって中枢神経内部の興奮が広い範囲に伝えられない状態にあり、その結果脳の全面的に統一化された活動状態がだんだん解体して、いわゆる解離の状態においての表象作用であるとされ、その人の置かれた環境、経験、現在の心身の状態などいろいろの条件のもとで生ずるもので、精神分析学の創始者であるS. フロイドなども夢に関する研究を行っています。

このように夢は人にとって特異な体験で、これを厳密に定義づけることは困難ではあるが、人はその生活の中で夢と現実のつながりを夢と言う言葉にいろいろの意味をもたせ、生活の中に取り込み、夢による医療（呪医）、神の意志の啓示をはじめとして夢に託して人間生活への意義や希望や反省の手段としています。

例えば中国では南柯の夢、邯鄲の夢といった話の中で空想（むなしさ）、はかなさについて語り、一方夢と生活のつながりから悪い夢をみたときはそれが現実として現われないように鼻は象、目は犀、尾は牛、体形は熊に似た獾（ばく）という想像上の獣に食べさせるという風習があり、日本にも伝わっています。

日本では夢は中国とは逆に理想を意味することが多く、良い夢をみると正夢として喜び、悪い夢をみるとさか夢として良い方へ思いをもって行き、希望を夢に託する場合が多く、人生は夢をもってその実現に向けて努力することこそ人間の生き甲斐であり、夢をもたない人間はだめ人間だとよくいわれています。

金沢大学計算機センターにとっては総合移転の中で総合情報処理センターとして早期に移転することが予てからの夢であり、歴代の運営委員の方々により実現への努力がはらわれてきましたが、大学自身の総合移転問題、大学院博士課程の設置問題と大きな夢があったこと、国家財政の抑制による計算機のレンタル料の頭打ちと相まって非常に厳しい状況にあったと思います。

しかし今年度で大学の大きな夢であった大学院博士課程も総合移転の実現に引続き走り出し、いよいよ総合情報処理センターとしての移転の夢も実現の時機に近づいてきた感が致します。

ゲーテは「夢をもちつづけていれば、いつか必ずそれが実現する時が来る」といっています。しかしただ夢をもちつづけていれば実現するものではなく、根気よく努力しつづけることが大切であります。どうか今後も関係の教職員は勿論のこと大学全体として強力に総合情報処理センターへの夢の実現に努力頂くことをお願いするものであります。